

ローマ帝国とアフリカ

——カルタゴ滅亡からイスラーム台頭までの 800 年史——

大清水 裕 著

東京 中央公論新社 2025 年 x+242 p.

本書は、古代ローマ史を専門とする著者による、ローマ帝国の北アフリカの版図の歴史である。カルタゴの服属からイスラームにとって代わられるまでの 800 年を対象としている。

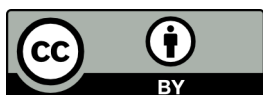
ローマ帝国のアフリカ大陸部は、ヨーロッパ史の一部として取り扱うべきなのか、それともアフリカ史の一部として取り扱うべきなのか。イスラームはサハラ以南も含めて、現在につながるアフリカ史の重要な要素であるから、イスラームの伝播以降の北アフリカがアフリカ史の一部となることにはまったく議論の余地はない。ではその前のローマ帝国時代はどうか。イスラームの伝播を境として歴史は断絶しているのか。いや、まぎれもなくアフリカ大陸の一部であるその土地で、人々の暮らしが途切れることなく現在まで脈々と受け継がれていると考えれば、ローマ帝国時代も紛れもなくアフリカ史の一部となろう。とはいえ、ローマ帝国時代のアフリカはサハラ以南で展開した歴史とのあいだにどれほどの強固な関係をもっているのか……アフリカ研究者はどうしてもこうした「もやもや」した思考にはまり込んでしまう。

本書によれば、ローマ帝国研究の読者のあいだにはこれと相似した状況があるとのことだ。ローマ帝国とアフリカというテーマ設定に対しては、アフリカはヨーロッパではないから、ローマ帝国の一部ではないのでないかという趣旨の反応をされることがあると著者は述べている。そのような見方が適切ではなく、むしろアフリカなくしてローマ帝国なしといえるほどの重要性をもっていたことが本書での著者の主張である。穀倉地帯としての存在感と皇帝を何人も輩出したことがその論拠として提示される。

この主張は、アフリカ研究者の側のもやもやにも答えを与えてくれるように思われる。著者の主張をとおして示されるのは、アフリカがヨーロッパの単なる帝国の辺境という以上の存在であり、独自の存在感を示した地域であったということである。これをふまえば、歴史の捉え方としては、ヨーロッパの一部として捉えることも、アフリカとして捉えることも可能となるだろう。どちらの地域に属するのかを、排他的な択一で捉える必要はないわけで、それは近年のグローバルヒストリーの考え方にも合致するものだろう。所与の地域概念にとらわれずに歴史をみることの重要性を感じさせてくれる。

具体的な内容に関しては、属州名の変遷を整理してくれているのがとてもうれしい。エチオピアという固有名詞の当時の使われ方も興味深い。また、わずかながら、サハラ砂漠を越えた先の民への言及も興味を引く。語り口は平明で、たいへん読みやすく、アフリカ史のなかのローマ帝国を考えるヒントに満ちた好著である。

佐藤 章（さとう・あきら／アジア経済研究所）



本記事は、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際 (CC BY 4.0) ライセンスのもとで提供されています (<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed>)。オリジナルの出典と著者を表示することを条件として、自由に配布、複製、利用することができます。

